



公民

公民的分野の導入の組み立て方 —「学習の前に」を活用して—

大分県 公立中学校 教諭

1

はじめに一公民的分野の導入、単元の導入の位置付け—

公民的分野の学習は、「現代社会がどう見えており、またそれをどう見るのか」といった学習内容を基礎に行われていく。特に抽象度の高い内容を扱う公民的分野においては、学習内容が身の回りの出来事と関連していることに気付かせる工夫が必要である。どの単元を扱うにしても、単元の導入時の動機付けや方向付けはその後の課題解決的な学習を進めるうえで重要な要素である。ここでは、『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）p.2～3の「学習の前に 45年前と今の社会を比べてみよう」を教材に、現代社会の特色の導入に関する授業案を示してみたい。

2

本教材の特徴—単元を通して活用できる秀逸なアクティビティ—

第1部第1章「現代社会と私たち」の導入となるこの「学習の前に」は、本章で学ぶ「現代社会の特色」に関わるイラストを見ながら、章の学習の見通しを持たせるページである。架空の「はるの市」にある「二度見駅」周辺の45年前と現在のまち並みには、現代の日本で進展している「情報化、グローバル化、少子高齢化」などの現象が端的なイラストで表現されている。このページは2枚のイラストを比べながら、まちがどのように変化してきたかを見つける活動（TRY1、TRY2）を通して、現代社会の特色や社会をとらえる枠組みについて学習する動機

付けを行い、「よりよい社会生活を営むために、私たちはどのようなことを大切にしていけばよいのだろうか」といった章の問いにつなげていく構成となっている。

本イラストは章の導入に使うだけでなく、その後の各単位時間の学習においてもこのページに立ち返ることで、抽象度の高い社会的事象の具体をイメージすることに使うことができる（本文にも「学びを深める工夫」として赤字でページや記号が記されている（図1））。

また、一連の学習の成果を踏まえて、イラスト内の社会的事象を情報化やグローバル化などに分類する

るかのよう
ちのう
人工知能(AI)と
p.173 p.3F2
います。例えば

図1 『社会科 中学生の公民』 p.7

での活用も想定している。「学習の前に」と「学習を振り返ろう」を活用することで、単元を通して評価を実現できるようにしている。

3

本時の展開案

【ねらい】

45年間で社会がどのように変化したかを表にまとめ、周りの人との意見交換を通して、より多くの変化を見つけようとしている。

【主な学習活動（時間の目安）】

- (1) 45年前の日本社会は…（5分）
- (2) TRY1をやってみよう（10分）
- (3) TRY2をやってみよう（25分）
- (4) これからの学習について（10分）

【展開上の工夫・留意点】

(1) まずは、イラストの45年前が西暦何年ごろの様子を示しているのか押さえておきたい(2025年-45=1980年)。1980年前後の日本がどのような出来事があった時期なのかは、歴史的分野の学びを生かすようにする。生徒に発表させたり教師が年表を示したりすることが考えられる。あるいは、歴史的分野で取り扱うであろう「乗用車と家庭電化製品の普及」のグラフ(『社会科 中学生の歴史』p.296[4])を見せて、時代背景をとらえさせることも考えられる。いずれにしても、ここではあまり時間をかけずに、1980年前後の社会の様子をざっくりとつかむようにする。ただし、生徒にとっては生まれる前の様子であることから、当時の実物や身近な地域での同様の写真(例：近くの駅の様子、学校の風景)などがあると、生徒はさらに実感が持ちやすくなるだろう。

(2) そのうえでTRY1に取り組ませる。TRY1は、イラスト中に示したア～ウがそれぞれ情報化、グローバル化、少子高齢化のいずれに関わる場面かを判断する活動で、短時間で取り組めるものである。生徒の実態によっては、

対話を促すためにも初めからペアで考えさせることも考えられる。その際、「現在のまち」と比較して、「何(ヒト、モノ、コト)がどのように変化しているのか、何(情報化、グローバル化、少子高齢化)を示す場面と判断できる。」というように、イラストから具体的な変化を説明できるように指導したい。例えば「ア→ア'」の情報化に関わる場面では、生徒からは「45年前は公衆電話を使っていたが、現在は携帯電話(スマートフォン)を使うようになっているので、情報化に関わる場面ではないか。」といった発言があるだろう。ここでは、公衆電話自体を使ったことのない生徒が増えてきているので、以前は誰もが持っていたテレホンカードの実物などを見せてもよいだろう。こうした変化の捉えが、現代社会の特色を表すキーワードの内容知につながることから、なぜそう考えるのかを説明させる活動は促したい。

(3) TRY2は、まずは5分程度個人で考えさせた後に、少人数グループを編成し、じっくりと対話の場面を設定したい。そのため、1単位時間の中で最も時間を確保して取り組ませる。また、変化の場面に気づきやすくし、対話を円

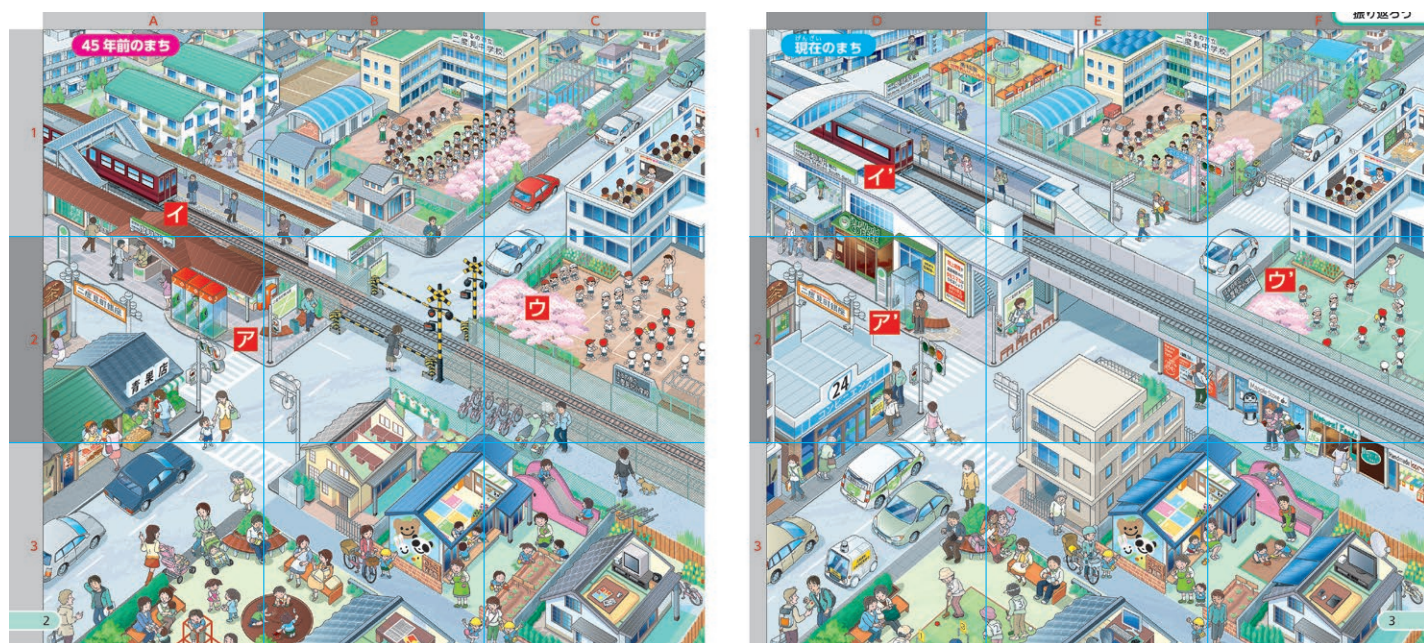


図2 『社会科 中学生の公民』 p.2～3

滑にするために、TRY2に入る前にイラストに示されたA～F、1～3を鉛筆で線を引きように指示するとよい(図2)。この活動においても、変化した場面を記述させるだけでなく、「その変化がどのような社会の状況(変化)を示しているのか」、「なぜそのような変化が起きているのか」を考え、説明できるように促す。この変化の意味や意義を考えることこそ今後の学習内容に結び付くものである。教科書に例として示したまとめ表に縦線を入れて、右側に意味や意義を端的に書かせてもよいだろう(図3)。

変化した場面	
例) D1 自動改札	変化の意味・意義

図3 『社会科 中学生の公民』 p.3

この対話の場面を通して、生徒から教師も気付かなかった多様な事象の変化が挙げられることもあるだろう。この時点では一つ一つを丁寧に取り上げる必要はなく、あくまで単元の導入として、半世紀ほどで起きている多くの社会の変容に気付かせ、その現象の意味や意義を予想させ、これからの学習の動機付けや方向付けとなればよい。ただ、生徒の多様な気付きは後の学習で回収できるように、ワークシートなどに記録させておくようにしたい。

なお、このイラストを取り扱う時期によっては、さらに事象が変化(進化)していることも考えられる(特に情報化)。生徒から「今はもっとこうなっているよ。」といった発言も想定されるが、授業者からすれば好都合である。この発言こそ、社会の変化がより加速度的に進んでいることを示すことになるからである。

(4) こうした活動を経て、1章の問いにつなげていく。社会が大きく変化していくなかで、「よりよい社会生活を営むために、私たちはど

のようなことを大切にしていけばよいのだろうか。」と共通の問いを投げかけ、章を通じてこの大きな問いについて考えていく見通しを持たせる。ここでは、現段階の暫定解を考えさせ、ワークシートに記入させる。この暫定解は、章の振り返りとして使うことで生徒が自己変容に気付くこともできるので、記述するための時間として5分以上は確保したいものである。この問いを起点に、「私たちはどのように社会の変化に対応していけばよいのだろうか。」と節の問いを示し、「現代社会はどのような特色を持つのか」、「そうした特色は私たちの生活にどのような影響をもたらすのか」といった各単位時間の学習課題につながる見通しを持たせて本時をまとめる。

4 ICT (QRコンテンツ) と思考ツールの活用

教科書にある「QRコンテンツ」の積極的な活用も考えたい。例えば、TRY1では画面をタップするだけで着色したり画面を拡大したりして、変化を分かりやすく示してくれる(図4)。どのような点に着目すればよいか分かりにくい生徒にとっては、十分な足場架けになるだろう。

QRコンテンツでは、ワークシートもWordとPDFの2つの形式を準備しているため、ワークシートを一部改変したい先生にとってはWordを、学習支援ソフトを日常的に活用している先生にとってはPDFを選択するなど、授業者の意図で使いやすいほうを選択することができる。共有可能なアプリなどを活用している学校においては、TRY2②の対話の場面では音声言語による対話だけでなく、各自で他者のまとめたものを通して、新たな気付きを与えることもできるだろう。

教科書に提示している表以外にも、思考ツールの活用が考えられる。例えば、TRY2におい



図4 『社会科 中学生の公民』QRコンテンツ「学習の前に」イラスト

てXチャートで「情報化、グローバル化、少子高齢化、その他」の4観点で変化する事象を焦点化し分類させる（図5）。

5 学習評価一単位を見通して意図的・計画的に一

ある1単位時間の学習評価を行う際には、その時間が単元においてどういう位置付けなのか、その時間を通して何を身に付けさせたいのかといった計画に基づく必要がある。どの授業にもいえることだが、目標やねらいを見失うと、「活動あって学びなし」になってしまいかねない。そうならないためにも、学習評価を計画する際には、単元を見通して「評定に用いる評価（全員対象の学習状況を記録に残す評価）」なのか、「学習改善につなげる評価（一部の生徒を見取り授業改善に役立てる評価）」なのかを明確にしたい。また、単元の目標および各単位時間の

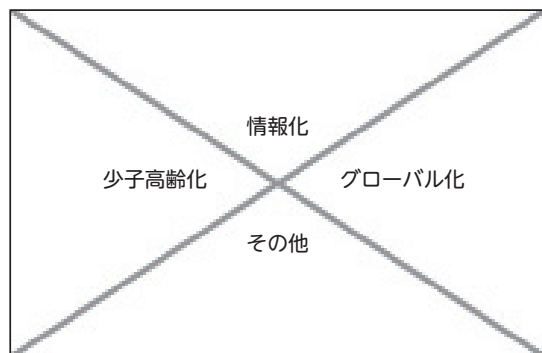


図5 Xチャート

ねらいに照らして、各単位時間における主な評価の観点、評価場面、評価方法も明確にしておく必要がある。

今回のケースでいえば、「学習改善につなげる評価」であり、「主体的に学習に取り組む態度」を評価の観点とする。評価場面は【主な学習活動】（3）で、評価方法は観察法とワークシートの記述である。判断基準としては次のような例が考えられる。

A	45年前と現在の社会の変化について、「二度見駅」周辺のまち並みを比べたり、他者の意見を受け入れ参考にしたりしながら、より複数の変化を表にまとめることができています。
B	45年前と現在の社会の変化について、「二度見駅」周辺のまち並みを比べながら、複数の変化を表にまとめることができています。

主体的に学習に取り組む態度の評価規準や判断基準の作成は多くの先生方が悩むところである。作成した評価規準などを、同じ教科の先生に見てもらい、文言の適切さや妥当性を話し合ってみるのもよいだろう。

6 おわりに一とともにワクワク、ムムムの授業を一

これからどのようなゴールを目指し、どのような学習を行うかを扱う単元の導入は、生徒の主体的に学習に取り組む態度を育成するうえで非常に重要である。帝国書院教科書の各章の頭に設けられている「学習の前に」は、どれも「ワクワク」するような使い勝手のよい教材である。一方で、イラストの細部に目を通すと「ムムム」と教師も疑問を持てるものでもある。45年前のまち並みを一般化したイラスト内の出来事は、若い先生方にとっては生徒と同様に未経験のことも多いだろう。そのため、生徒とともに取り組み、学ぶ楽しさを、他者と協働する有用性を味わいながら授業づくりを行ってほしい。